

教育相談

児童生徒に命の大切さをはぐくむための研究
－命に関する意識調査を通して－

教育相談課 研究員 片沼 誠二

要 旨

県内小・中学校の児童生徒を対象に「命に関する意識調査」を実施し、分析した結果、「命の大切さ実感尺度」において、校種、性とも有意差があり、小学校より中学校、女子より男子が、命を大切に思う実感が薄い傾向にあることが分かった。また、「命は大切なものだと思う認識」は、「畏敬念」、「安定感」、「五感体験」との関係が示唆され、「他の人の命は大切だと思う認識」は、「畏敬念」、「安定感」、「五感体験」に加え、「連帯感」、「有用感」との関係が示唆された。

キーワード：命の大切さ 意識調査 分散分析 重回帰分析

I 主題設定の理由

近年、命にかかわる重大事件を引き起こす子どもが現れてきている。平成16年6月には、長崎県佐世保市において、小学校6年生の女子児童による同級生殺害事件が発生した。同年7月には、新潟県三条市において、小学校6年生の男子児童による同学年児童殺傷事件が発生した。さらに平成17年9月には、北海道滝川市において、小学校6年生の女子児童がいじめによって自殺する事件が発生し、社会に大きな衝撃を与えた。

文部科学省では、長崎県佐世保市の事件を受け、平成16年10月、「児童生徒の問題行動対策重点プログラム（最終まとめ）」を発表し、命を大切にする教育の充実を推進してきた。また、平成17年には長崎県教育委員会、平成19年には岡山県玉野市教育委員会、北海道教育委員会、平成20年には神奈川県教育委員会が、児童生徒に対して命に関する意識調査を実施し、結果を公表している。兵庫県教育委員会では、平成18年度に「命の大切さ」を実感させる教育プログラム構想委員会を設置し、『命の大切さ』を実感させる教育への提言』を発行したり、兵庫県の小・中・高校においては、授業の成果を事例集としてまとめたりしている。

本県でも、長崎県佐世保市の事件をきっかけに、平成16年度から「命を大切にする心を育む県民運動」を推進しており、幼稚園・保育所・学校に対して、「乳幼児期から命を大切にする心を育む」、「道徳教育の充実」、「豊かな心を育む体験活動の充実」の三つを重点として、対策に乗り出している。

現代の子どもたちは、核家族化の進行によって命にかかわる場面にふれる機会が少なくなり、命の尊さに対する感受性が弱まっていることが指摘されている。そこで、子どもたちに命のかけがえのなさ、命がつながりあっていること等に気付かせ、生きることの素晴らしさや生きる喜び等を実感させることが重要になってくる。本研究では、青森県の小・中学校の児童生徒に命に関する意識調査を実施・分析することで、本県の児童生徒の命に関する意識の実態を明らかにするとともに、児童生徒に命を大切にする心をはぐくむための指導と、その方向性を探るため、本主題を設定した。

II 研究目標

児童生徒に命に関する意識を調査し分析することによって、児童生徒の命に関する意識の実態を明らかにし、児童生徒に命を大切にする心をはぐくむ指導の方向性を探る。

III 研究仮説

児童生徒に対し命に関する意識を調査し分析することによって、児童生徒の命に関する意識の実態が明らかになるであろう。また、校種・性別等についての分析結果を考察することによって、児童生徒に命を大切にする心をはぐくむ指導の方向性が明らかになるであろう。

IV 研究の実際とその考察

1 方法

(1) 調査対象者

調査対象地区に偏りがないようにするため、依頼校決定に当たり、小学校においては5年生を対象に、県内6教育事務所管内から1校ずつ抽出した。中学校においては2年生を対象に、県内4市から抽出した。なお、地区ごとの校種・性別の人数構成は表1のとおりである。

表1 調査対象者の地区ごとの校種・性別の人数構成

校種	性別	A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	F地区	総計
小学校	男子	76	60	49	48	49	47	329
小学校	女子	65	50	57	66	40	53	331
中学校	男子	100	82	96	-	-	36	314
中学校	女子	86	82	96	-	-	30	294
計		327	274	298	114	89	166	1,268

※欠損データを含んだ集計である。

(2) 調査時期

平成20年9月中旬～10月上旬

(3) 調査用紙の構成

無記名の質問紙法による調査

ア 「命の大切さ実感尺度」

兵庫県の「命の大切さ」を実感させる教育プログラム開発研究委員会が作成した18項目からなる尺度を使用した。下位尺度は、「肯定感」(自己肯定感：2項目)、「有用感」(自己有用感：2項目)、「達成感」(成就感・達成感：2項目)、「連帯感」(連帯感：2項目)、「畏敬念」(自然・生命への畏敬の念：2項目)、「安定感」(愛する・愛される喜び：2項目)、「五感体験」(五感で感じる喜び：2項目)、「感動体験」(芸術に対する感動：2項目)、「命の大切さ」(命の大切さ：2項目)の九つで構成され、各質問項目の反応が、5：「よくある」、4：「ときどきある」、3：「どちらとも言えない」、2：「めったにない」、1：「全くない」の5件法で回答を求めた。

イ 「命の大切さに関連する質問」

神奈川県教育委員会で作成された『『いのち』についてのアンケート調査』、北海道教育委員会で作成された『『命の大切さに関する意識調査』報告書』を参考に作成し、22項目の構成とした。また、質問は、「命の大切さ実感尺度」に合わせ、5件法で回答を求めるとした。なお、質問13に「あなたは、『うそ』をついたことがありますか。」という質問を入れ、1の「全くない」に○をつけた場合、信頼性のない回答と見なし、統計処理からは除外した。

今回のデータの統計解析には、「SPSS10.0J for Windows」を用いた。

2 結果

(1) 「命の大切さ実感尺度」の校種別、性別間の比較

表2 「命の大切さ実感尺度」の平均値・標準偏差・有意差(校種・性別)

命の大切さ実感尺度の下位尺度	校種性別 人数	小学校	中学校	有意差	小学男子	小学女子	有意差	中学男子	中学女子	有意差
		N=633	N=596		N=311	N=322		N=306	N=290	
肯定感(自己肯定感)	平均値	7.01	6.30	P<.001	7.01	7.02		6.45	6.13	P<.05
	標準偏差	(1.80)	(1.92)		(1.91)	(1.69)		(1.97)	(1.85)	
有用感(自己有用感)	平均値	7.51	6.59	P<.001	7.38	7.64		6.52	6.66	
	標準偏差	(1.69)	(1.73)		(1.78)	(1.60)		(1.84)	(1.61)	
達成感(成就感・達成感)	平均値	8.78	8.57	P<.05	8.84	8.73		8.63	8.51	
	標準偏差	(1.45)	(1.60)		(1.50)	(1.41)		(1.59)	(1.61)	
連帯感(連帯感)	平均値	7.84	7.84		7.69	7.98	P<.05	7.64	8.06	P<.01
	標準偏差	(1.83)	(1.85)		(1.93)	(1.71)		(1.89)	(1.79)	
畏敬念(自然・生命への畏敬の念)	平均値	8.03	7.13	P<.001	7.89	8.17		7.05	7.22	
	標準偏差	(1.83)	(1.98)		(1.88)	(1.77)		(2.03)	(1.93)	
安定感(愛する・愛される喜び)	平均値	8.59	8.01	P<.001	8.50	8.67		7.82	8.20	P<.05
	標準偏差	(1.78)	(1.94)		(1.90)	(1.66)		(1.98)	(1.88)	
五感体験(五感で感じる喜び)	平均値	8.85	8.65	P<.05	8.91	8.78		8.93	8.36	P<.001
	標準偏差	(1.37)	(1.67)		(1.41)	(1.34)		(1.47)	(1.81)	
感動体験(芸術に対する感動)	平均値	7.64	7.28	P<.01	6.75	8.50	P<.001	6.25	8.36	P<.001
	標準偏差	(2.20)	(2.23)		(2.37)	(1.60)		(2.16)	(1.74)	
命の大切さ(命の大切さ)	平均値	9.54	8.99	P<.001	9.50	9.57		8.88	9.11	
	標準偏差	(1.08)	(1.61)		(1.13)	(1.03)		(1.72)	(1.47)	
「命の大切さ実感尺度」(合計)	平均値	73.79	69.36	P<.001	72.46	75.08	P<.01	68.17	70.60	P<.01
	標準偏差	(9.81)	(10.09)		(10.86)	(8.49)		(10.44)	(9.57)	

「命の大切さ実感尺度」の平均値及び下位尺度（肯定感，有用感，達成感，連帯感，畏敬念，安定感，五感体験，感動体験，命の大切さ）の平均値において，有意差があるかどうかを検討するため，下位尺度の得点を従属変数とし，校種（小学校，中学校），性（男子，女子）それぞれを独立変数とする分散分析を行った。結果は表2のとおりである。なお，欠損値のあるデータは，統計解析においてリストごとに除外した。

ア 校種別での比較

「命の大切さ実感尺度」の平均値において，図1のように中学校の平均値が小学校の平均値より低く，有意差が認められた ($F_{(1,1227)}=61.068, p<.001$)。

下位尺度（肯定感，有用感，達成感，連帯感，畏敬念，安定感，五感体験，感動体験，命の大切さ）の平均値において，図2のように「連帯感」($F_{(1,1227)}=.004, n.s.$)を除き，「肯定感」($F_{(1,1227)}=45.990, p<.001$)，「有用感」($F_{(1,1227)}=89.527, p<.001$)，「達成感」($F_{(1,1227)}=6.089, p<.05$)，「畏敬念」($F_{(1,1227)}=68.571, p<.001$)，「安定感」($F_{(1,1227)}=30.111, p<.001$)，「五感体験」($F_{(1,1227)}$

$=4.901, p<.05$)，「感動体験」($F_{(1,1227)}=8.247, p<.01$)，「命の大切さ」($F_{(1,1227)}=49.149, p<.01$)については，中学校の平均値が小学校の平均値より低く，有意差が認められた。

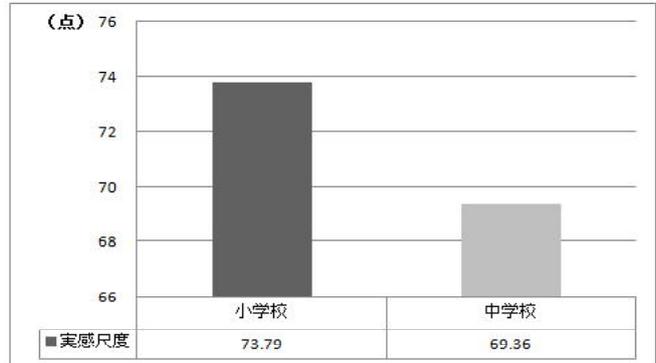


図1 命の大切さ実感尺度の平均値（校種別）

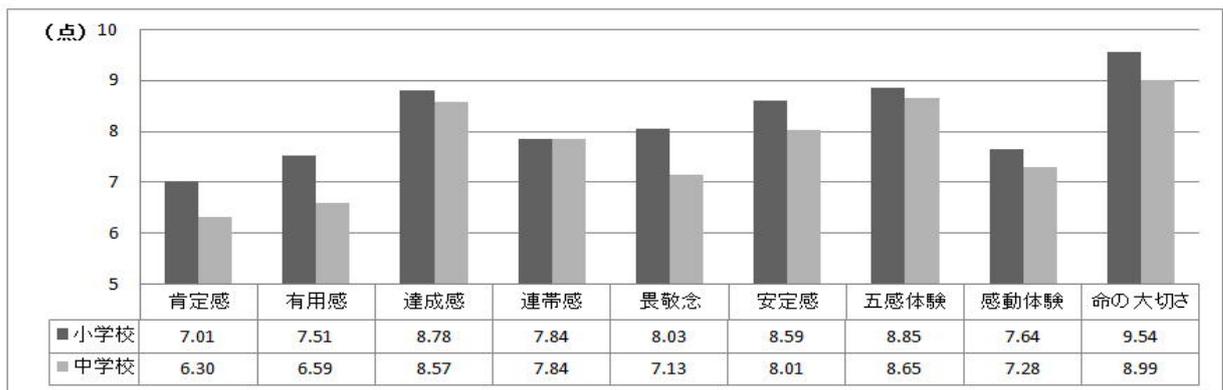


図2 命の大切さ実感尺度における下位尺度の平均値（校種別）

イ 性別での比較

(ア) 小学校での性差

「命の大切さ実感尺度」の平均値において，図3のように男子の平均値が女子の平均値より低く，有意差が認められた ($F_{(1,631)}=11.463, p<.01$)。

下位尺度（肯定感，有用感，達成感，連帯感，畏敬念，安定感，五感体験，感動体験，命の大切さ）の平均値において，図4のように「連帯感」($F_{(1,631)}=4.103, p<.05$)，「感動体験」($F_{(1,631)}=119.817, p<.001$)については，男子の平均値が女子の平均値より低く，有意差が認められた。しかし，他の七つの下位尺度では，有意差は認められなかった。

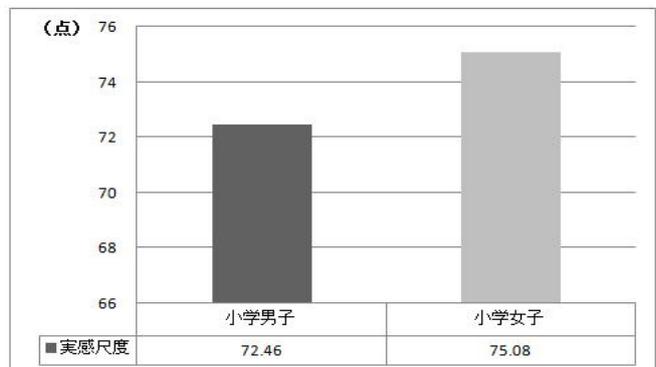


図3 命の大切さ実感尺度の平均値（性別：小学校）

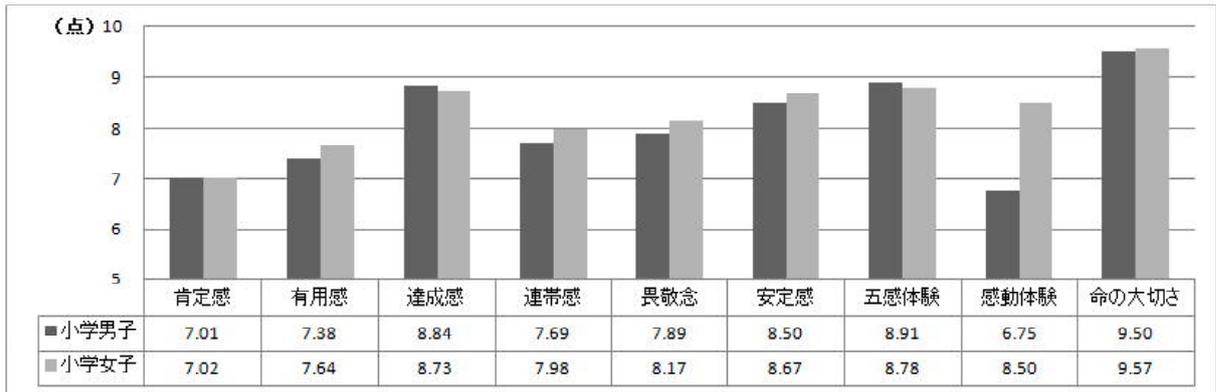


図4 命の大切さ実感尺度における下位尺度の平均値（性別：小学校）

他県との比較として、兵庫県内A市の小学校9校（5年生は男子434名、女子421名）を対象に実施した結果（兵庫県教育委員会、2006）と本県の結果を比較した。図5のように「命の大切さ実感尺度」において、本県の平均値は、兵庫県の平均値より男女とも低かった。また、下位尺度の平均値は図6・図7のように、若干の差がみられたものの、男子の「感動体験」の低さや女子の「肯定感」の低さなど、ほぼ同様な傾向が両県にみられた。

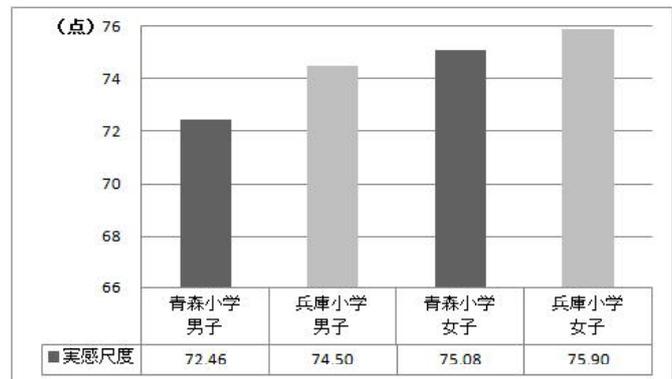


図5 青森県と兵庫県における命の大切さ実感尺度の平均値（性別：小学校）

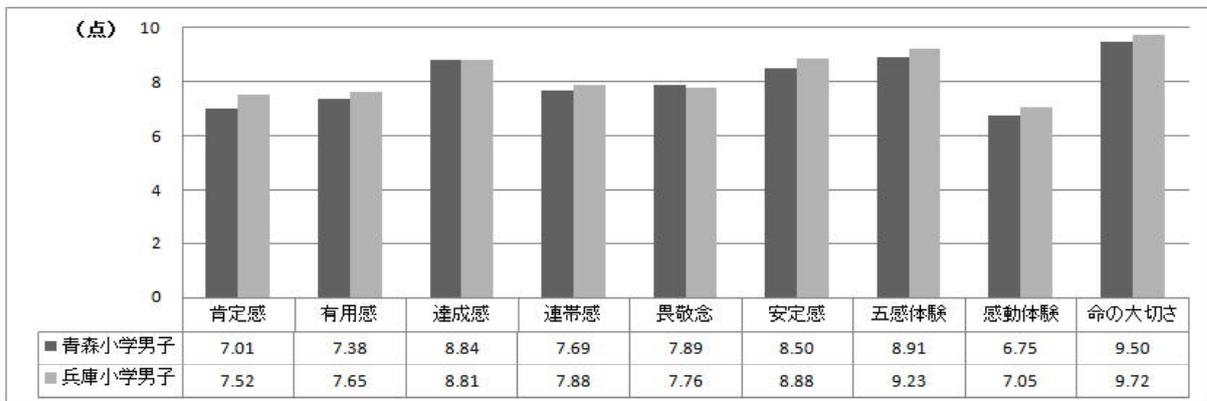


図6 青森県と兵庫県の下位尺度の平均値（小学男子）

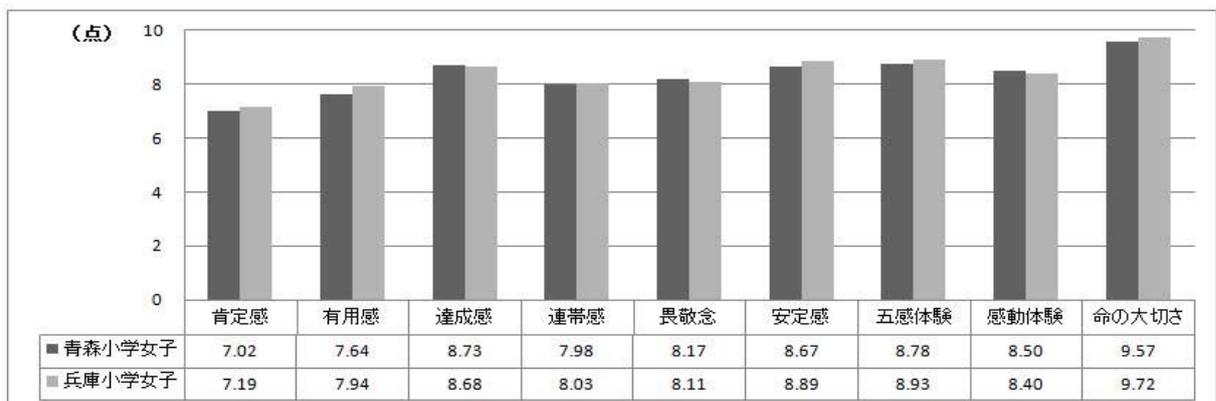


図7 青森県と兵庫県の下位尺度の平均値（小学女子）

(イ) 中学校での性差

「命の大切さ実感尺度」の平均値において、図8のように男子の平均値が女子の平均値より低く、有意差が認められた ($F_{(1,594)}=8.747, p<.01$)。

下位尺度（肯定感、有用感、達成感、連帯感、畏敬念、安定感、五感体験、感動体験、命の大切さ）の平均値において、図9のように「肯定感」($F_{(1,594)}=4.167, p<.05$)、「五感体験」($F_{(1,594)}=18.502, p<.001$)は、男子の平均値が女子の平均値より高く、有意差が認められた。「連帯感」($F_{(1,594)}=7.934, p<.01$)、「安定感」($F_{(1,594)}=5.741, p<.05$)、「感動体験」($F_{(1,594)}=1.223, p<.001$)については、男子の平均値が女子の平均値より低く、有意差が認められた。他の四つの下位尺度では、有意差は認められなかった。

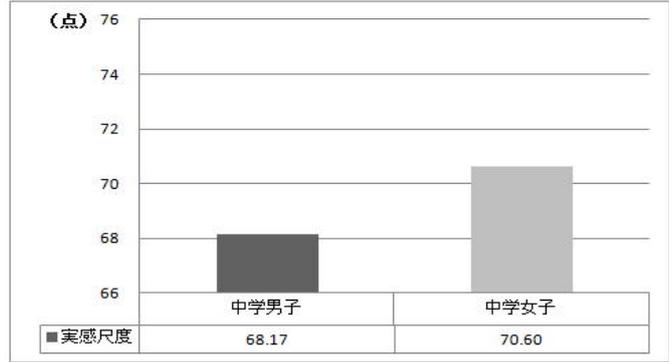


図8 命の大切さ実感尺度の平均値（性別：中学校）

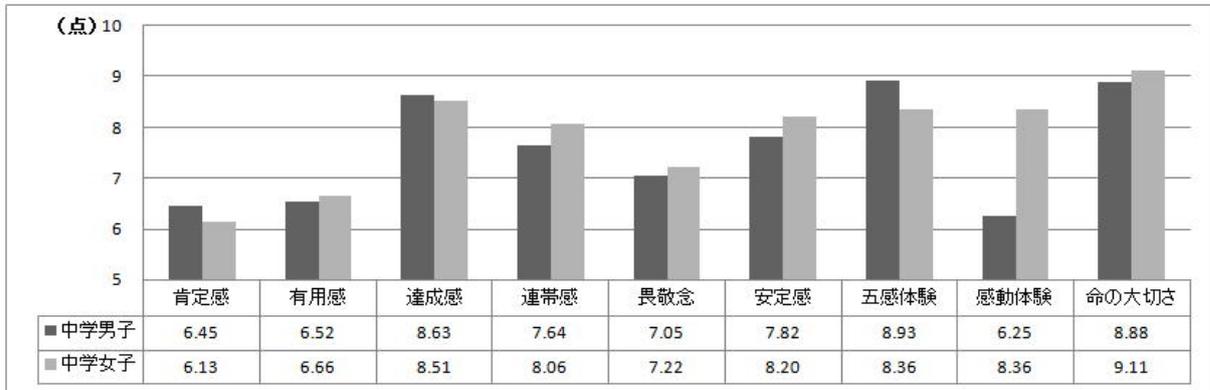


図9 命の大切さ実感尺度における下位尺度の平均値（性別：中学校）

(2) 命の大切さに対する認識と「命の大切さ実感尺度」との関係性

「命は大切なものだと思うか」と「他の人の命は大切だと思うか」の質問項目に対して、「命の大切さ実感尺度」の下位尺度である「命の大切さ」を除いた八つの下位尺度と関係性があるかどうかを調べるために、校種、性ごとにステップワイズ法による重回帰分析を行った。なお、欠損値のあるデータは、統計解析においてリストごとに除外した。

ア 「命は大切なものだと思う認識」と八つの下位尺度との関係性

(ア) 校種別での関係性

「命は大切なものだと思うか」の質問項目と八つの下位尺度（肯定感、有用感、達成感、連帯感、畏敬念、安定感、五感体験、感動体験）との関係性は、表3のとおりである。有意水準5%で各下位尺度が選出され、重決定係数は有意となっていた。

小学校では、「命は大切なものだと思う認識」に「安定感」、「畏敬念」、「五感体験」、「肯定感」に関する質問との関係性が認められた。

中学校では、「畏敬念」、「安定感」、「五感体験」、「感動体験」に関する質問との関係性が認められた。

表3 「命は大切なものだと思う認識」と八つの下位尺度との関係性

校種	小学校	中学校	小学男子	小学女子	中学男子	中学女子
人数	N=635	N=596	N=313	N=322	N=306	N=290
調整済R2値	.273***	.255***	.293***	.241***	.251***	.245***
F値	60.418***	51.860***	33.354***	34.924***	34.987***	32.250***
肯定感	.094*		.132*			
有用感						
達成感						
連帯感						
畏敬念	.217***	.347***	.193**	.252***	.383***	.359***
安定感	.237***	.142***	.256***	.217***	.131*	.156**
五感体験	.176***	.133**	.145**	.217***	.152**	.160**
感動体験		.099**				

※「*」は、有意水準を表す。*** $P<.001$ ** $P<.01$ * $P<.05$

(イ) 性別での関係性

小学校男子では、「命は大切なものだと思う認識」に「安定感」、「畏敬念」、「五感体験」、「肯定感」に関する質問との関係性が認められ、校種別の結果と同じ傾向がみられた。女子では、「畏敬念」、「安定感」、「五感体験」に関する質問との関係性が認められた。

中学校では、男女とも、「命は大切なものだと思う認識」に「畏敬念」、「五感体験」、「安定感」に関する質問との関係性が共通して認められた。

イ 「他の人の命は大切だと思う認識」と八つの下位尺度との関係性

(ア) 校種別での関係性

「他の人の命は大切だと思うか」の質問項目と八つの下位尺度（肯定感、有用感、達成感、連帯感、畏敬念、安定感、五感体験、感動体験）との関係性は、表4のとおりである。有意水準5%で各下位尺度が選出され、重決定係数は有意となっていた。

小学校では、「他の人の命は大切だと思う認識」に「畏敬念」、「連帯感」、「安定感」、「五感体験」に関する質問との関係性が認められた。

中学校では、「畏敬念」、「有用感」、「連帯感」、「五感体験」、「安定感」に関する質問との関係性が認められた。

表4 「他の人の命は大切だと思う認識」と八つの下位尺度との関係性

校種	小学校	中学校	小学男子	小学女子	中学男子	中学女子
人数	N=633	N=595	N=311	N=322	N=306	N=289
調整済R2値	.156***	.245***	.173***	.135***	.240***	.240***
F値	30.271***	33.083***	22.661***	17.681***	20.277***	23.685***
肯定感		-.151***			-.147*	-.120*
有用感		.222***			.196**	.260***
達成感						
連帯感	.167***	.135**	.267***	.126*	.239***	
畏敬念	.176***	.231***		.237***	.228***	.287***
安定感	.109*	.106*		.145**		
五感体験	.086*	.129**	.173**		.130*	.217***
感動体験			.113*			

※「*」は、有意水準を表す。***P<.001 **P<.01 *P<.05

(イ) 性別での関係性

小学校男子では、「他の人の命は大切だと思う認識」に「連帯感」、「五感体験」、「感動体験」に関する質問との関係性が認められた。女子では、「畏敬念」、「安定感」、「連帯感」に関する質問との関係性が認められた。

中学校男子では、「他の人の命は大切だと思う認識」に「連帯感」、「畏敬念」、「有用感」、「五感体験」に関する質問との関係性が認められた。女子では、「畏敬念」、「有用感」、「五感体験」に関する質問との関係性が認められた。

(3) 命の大切さに関連する意識の実態

今回実施した「命の大切さに関連する質問」の結果から、小・中学校の性別においては、表5のような実態が明らかになった。

質問項目①では、「死んだ人が生き返ることがある」と思っている割合は、小学校で約2割、中学校で約1割いることが分かった。このような意識の児童生徒は、長崎県、岡山県玉野市、大阪府、神奈川県教育委員会のアンケートの集計にもみられた。質問項目③では、食べ物の命をもらうことで我々は生かされているという意識が、中学生になると低くなる傾向がうかがえた。また、質問項目⑤では、小・中学校とも約2割前後、生きることや死について考えていないことが分かった。さらに、表5全体から、小・中学校とも、男子は女子より命の大切さに関連する意識が薄い傾向がうかがえた。

表5 命の大切さに関連する意識の実態

いのちの大切さに関連する質問項目	小学男子	小学女子	中学男子	中学女子
①死んだ人が生き返ることがあると思っている割合	22.5%	17.0%	9.0%	10.2%
②全ての生き物に命は1つしかないと思っていない割合	2.4%	1.8%	5.8%	3.1%
③食べ物から命をもらっていると思っていない割合	10.4%	7.3%	31.7%	21.1%
④命がつながっている(祖父母→両親→自分→赤ちゃん)と思っていない割合	6.4%	4.2%	13.7%	5.4%
⑤自分の生死を考えることがない割合	19.8%	14.8%	21.1%	17.1%
⑥動植物の誕生をうれしいと思わない割合	4.9%	3.0%	16.3%	5.8%
⑦動植物の死を悲しいと思わない割合	4.9%	1.8%	9.3%	4.1%
⑧身近で赤ちゃんが誕生してもうれしいと思わない割合	4.6%	3.9%	12.1%	4.1%
⑨身近な人が亡くなっても悲しいと思わない割合	1.2%	2.1%	4.8%	0.0%

※①は「そう思う」と回答した割合を表す。他は、「全く思わない」、「あまり思わない」を合わせた回答の割合を表す。

V 研究のまとめ

1 「命の大切さ実感尺度」の校種別、性別間の比較における考察

「命の大切さ実感尺度」における校種別比較と性別比較の結果から、小学校より中学校、女子より男子が、命を大切に思う実感が薄い傾向にあることが分かった。また、兵庫県における小学校5年生との比較から、小学校の場合、男女とも各下位尺度において、ほぼ同様の傾向がみられた。

学校現場で命の大切さを指導していく場合、校種や性差を踏まえた指導の必要性が示唆された。男子においては低い傾向にあった「感動体験」、「肯定感」、「有用感」を、女子においては「肯定感」、「有用感」を高めることに配慮していく必要があると思われる。

2 命の大切さに対する認識と「命の大切さ実感尺度」との関係性の考察

「命は大切なものだと思う認識」は、小・中学校、男女とも、自然や命の素晴らしさに感動するといった「畏敬念」、身近に何でも話せる人がいることや家族と楽しい時間を過ごすといった「安定感」、よく運動したりおいしく食事をとったりするといった「五感体験」を充実させていくことが示唆された。また、「他の人の命は大切だと思う認識」は、「畏敬念」、「安定感」、「五感体験」に加え、友達と同じ目的をもって活動し、心が一つにまとまったと感じる「連帯感」を、中学校においては、お手伝いなどしてほめられることや人の役に立つ活動をするといった「有用感」を高めることが示唆された。

学校現場で命の大切さを実感させるための指導をする場合、「畏敬念」を高めるためには、自然体験を通して自然の美しさや素晴らしさを実感させたり、実際に赤ちゃんに触れ合う体験を通して命の尊さや素晴らしさを実感させたりすること等が考えられる。河合は、「命が大切であるという思いは、子どもたち自身の実感や体感から生まれてくるもので、頭から頭に働きかけても意味がない。」と述べている（河合隼雄，2005）。このことから、体験活動が命を大切にする心をはぐくむために重要であることを示していると思われる。

「安定感」を高めるためには、家族内のコミュニケーションを大切にする意識を促すとともに、教師との信頼関係を築き、友達との人間関係を安定させることが大切であると思われる。「五感体験」を高めるために体育では、様々な動きのある運動を多く取り入れて運動感覚を高めさせたり、給食では、食べ物の香りや食感等を意識して食べさせたりすることが大切ではないかと思われる。また、図工や美術では、本物の芸術作品を鑑賞したり、音楽では、生の演奏を聴いたりすることも五感を高めるために大切ではないかと思われる。

他の人の命の大切さを実感させるための指導をする場合、「畏敬念」、「安定感」、「五感体験」に加え、「連帯感」を高めるためには、学級での班や係、同学年、異学年で組織する縦割り班活動、クラブ、委員会、部活動、行事等、様々な集団の中で、同じ目的や目標に向かって心一つにして仲間と協力しながら活動すること、失敗したときは励まし、困っているときは助けてあげるなど、相手のことを思う気持ちを意識させることで仲間意識が強くなっていくと思われる。また、「有用感」を高めるためには、互いのよさや頑張りを子どもたち同士で認め合うこと、人のためにしてくれたことに感謝すること、役に立っていることを教師がみんなの前で褒めたり、個々の存在の大きさを伝えたりすること等が大切ではないかと思われる。

3 命の大切さに関連する意識の実態における考察

「命の大切さに関連する質問」の結果から、死んだら生き返らないといった「命の絶対性」を十分理解させる指導が大切であると思われる。養老は、「教員自身が『命の大切さ』をどう思うかということが一番大事である。」「命の大切さの教育は、教員自身がいきいきと生きていないと意味がない。」と述べ、教師の命に対する考え方の重要性を提言している（養老孟司，2005）。命は大切なもの、尊いものであることを言葉にするのは簡単である。児童生徒は、命が大切であることを頭では理解している。しかし、それが行動や実感として伴っていない傾向にあると思われる。児童生徒に命の大切さをはぐくむために我々教師は、自ら「命」というものを改めて見つめ直すことから始めるとともに、自校における児童生徒の実態を的確に把握し、家庭や地域の理解と協力を得ながら、全教育活動を通して児童生徒に命の大切さを意識させ、自然体験や社会体験、奉仕活動等の体験活動を通して「命の大切さ」を実感させることが重要ではないかと思われる。

VI 本研究における課題

本研究は、児童生徒に命に関する意識を調査し分析することによって、児童生徒の命に関する意識の実態を明らかにするとともに、児童生徒に命を大切にすることを促す指導の方向性を探ることを目標としてきた。今回、「命の大切さ実感尺度」を用いたが、質問項目が18項目と限定されており、命の大切さを促すためには、さらに適切な質問項目を加えて質問紙を作成する研究が必要だと思われる。また、今回の調査で明らかになった児童生徒の命に関する意識の実態や分析結果を踏まえ、今後学校現場において、命の大切さを実感できる教育プログラムをどのように構築し、実践するかが課題である。

<引用文献>

- 河合隼雄 2005 『「命の大切さ」を実感させる教育への提言（改訂版）』, p. 12, 兵庫県教育委員会
養老孟司 2005 『「命の大切さ」を実感させる教育への提言（改訂版）』, p. 15, 兵庫県教育委員会

<参考文献>

- 神奈川県教育委員会 2007 『「いのち」についてのアンケート調査』
神奈川県教育委員会 2007 『「『いのち』を大切にすることを促す教育」指導資料』
教育開発研究所 2005 『「命を大切にすることを促す教育」をどう進めるか』
兵庫県教育委員会 2006 「命の大切さ実感尺度」の開発について 『「命の大切さ」を実感させる教育プログラム実践事例集』, pp. 212-216

<参考URL>

- 岡山県玉野市教育委員会 2007 「命に関するアンケート」
<http://www.ednet.tamano.okayama.jp/gakkou/html/inochi.pdf> (2008. 6. 23)
長崎県教育委員会 2004 「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」
[http://www.pref.nagasaki.jp/edu/gikai/contents/teirei/200501/isikityousa.pdf#search\(2008.5.8\)](http://www.pref.nagasaki.jp/edu/gikai/contents/teirei/200501/isikityousa.pdf#search(2008.5.8))
北海道教育委員会 2007 『「命の大切さに関する意識調査」報告書』
[http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/NR/rdonlyres/6A47F168-6C88-4EA9-B2B3-0D64CA08ECD8/0/inochihoukoku.pdf#search\(2008.5.8\)](http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/NR/rdonlyres/6A47F168-6C88-4EA9-B2B3-0D64CA08ECD8/0/inochihoukoku.pdf#search(2008.5.8))